

令和元年6月13日現在

機関番号：34317

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16736

研究課題名(和文)近世寺社縁起絵巻と諸藩御用絵師に関する史的研究

研究課題名(英文)A historical study on picture scrolls and feudal lord painters depicting the traditions of temples in the Edo period

研究代表者

鈴木 堅弘 (Suzuki, Kenko)

京都精華大学・人文学部・研究員

研究者番号：80567800

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、九州、関東、関西、東北の寺社に遺る「近世寺社縁起絵巻」をフィールド調査し、その図像の意味を読み解き、詞書・落款・署名を翻刻することにより、地方寺社と御用絵師との絵巻を介した歴史的な繋がりを自明化するにいたった。

また、「寺社」と「諸藩大名家」の関係性が江戸時代の寺社縁起絵巻の制作に与えた影響は甚大であり、寺社が諸藩大名家の菩提寺となり、寺社縁起絵巻・縁起書の制作を御用絵師に依頼した経緯を明らかにした。他方、これらの絵巻の図像・詞書を分析することにより、絵巻の表現や物語に民衆をコントロールする「寺社縁起絵巻の政治性」を有する新たな視座を見出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の寺社縁起絵巻の研究は平安後期から室町期かけての作品に限られた傾向にあったが、本研究にてその視座を江戸時代まで延ばし、各地方の寺社に遺る近世寺社縁起絵巻をフィールド調査にて発見・翻刻し、その図像データを収集した。

さらに本研究にて、寺社が諸藩大名や御用絵師と共にこれらの絵巻を介して、その信仰性や伝承性を民衆に伝える「政治的な観点」を見出した学術的意義は大きい。また、地方における寺社縁起絵巻の調査・報告を通じて、諸地域で活躍した御用絵師の存在を掘り起こす契機となり、地方の歴史文化を再認識する意味での社会的意義を有している。

研究成果の概要(英文)：In this study, I conducted field surveys the picture scrolls in the Edo period of temples in Kyushu, Kanto, Kansai, and Tohoku. And this study demonstrated the historical relationship between the local temples and feudal lord painters by exploring the meaning of the symbols drawn on the picture scroll.

Also, the relationship between the temple and the feudal lord has a great influence on the production of the temples picture scrolls in the Edo period. In addition, this study revealed the circumstances in which the feudal lord painters painted the picture scrolls and books of the temple. by analyzing these picture scrolls, I discovered a new perspective with expression of political control in these picture scrolls.

研究分野：日本美術史

キーワード：絵巻 図像学 伝承 物語 御用絵師 江戸 大名 縁起

## 1. 研究開始当初の背景

(1) これまで寺社縁起絵巻の研究に関しては、おもに美術史と国文学の分野にて行われてきた。美術史においては、平安後期から中世期の作品を考究の対象とすることが多く、図像の描き方を取り扱う「様式研究」と、文献資料をもとにその制作史や絵師の特定を探る史学研究を中心に進められている。こうした研究により、中世期の寺社縁起絵巻に関しては美術館や博物館の特別展示などで目にする機会も多く、現在、その絵図は『新修日本絵巻物全集』(角川書店)、『日本絵巻大成』(中央公論社)などの絵巻叢書の刊行によって確認できる。

また美術史における寺社縁起絵巻の研究は、幕府や宮廷が抱える狩野派や土佐派の高名絵師による作品を中心とした考究に終始する傾向にあり、その視座も近世期中期から後期にまでは至っていない。また近世前期の寺社縁起絵巻については狩野派や土佐派の絵師の作品に関しては研究が進められているが、とくに地方諸藩が抱えていた御用絵師が描く作品については研究がなされていないのが現状である。

他方、近年、国文学の分野での寺社縁起絵巻の研究については、説話・伝承の観点から絵巻の物語性の分析を中心に行われている。その方法は、縁起絵巻の物語に関する典拠を中世期の文献資料等に探る考究がなされており、それらの研究では、絵図の内容を分析・理解する視座からのアプローチではなく、絵巻の詞書に記された文面に着目する傾向が強く、描かれた図像表現の意味に関しては等閑視されることも多い。

(2) 本研究では、こうした近年の近世寺社縁起絵巻に関する研究の進展を踏まえて、これまであまり考究の俎上にのらなかった地方諸藩で制作された寺社縁起絵巻を研究対象とした。その際に、諸国大名の寺社縁起の受容史を通じて、寺社の宗教観や信仰性と諸藩大名の政治性が絵画という文化的事物を通じてどのように関連しているのか、その「実態」と「歴史」を捉えることをねらいとした。

そして地方寺社に遺る近世寺社縁起絵巻の所蔵調査から実施し、美術史学の手法である絵師の落款や署名を詳細に分析することにより、まずは作品の制作経緯を明らかにすることからはじめた。次に、その絵巻の描かれた図像や詞書の分析を図像学の手法を用いておこない、国文学の手法をモデルに同時代の文献資料をひもとくことで、絵図に描かれた物語性の起源や典拠を明らかにすることをめざした。さらに本研究では、寺社が所属した諸藩における大名家と御用絵師との関係を示した歴史資料(文書・手紙など)を分析することにより、大名家がお抱えの絵師を介して寺社が民衆に与える信仰性や宗教性の影響力をコントロールした政治性を明らかにすることを主たる目的として実施した。

(3) また研究代表者は、自身が代表をつとめた2013年度・2016年度「明治期の高僧絵伝」における地方寺社伝承の近代化に関する研究(独立行政法人日本学術振興会[若手研究B])にて、おもに関東・北陸・九州の諸寺院にて寺社縁起絵巻を数多く調査する機会を得た。そうした調査では、絵師の落款などが記されているにもかかわらず、その人物と寺社の歴史的な関連性を明らかにすることができず、今後の研究課題として本研究に取り組むきっかけとなった。そうした契機をふまえて、本研究では、寺社縁起絵巻の研究に関する次なるステップとして地方の御用絵師の史的考察を実施し、近世諸藩の大名家と地方寺社の政治的な関係性を明らかにすると共に、諸藩の御用絵師が寺社縁起絵巻の制作にいたった史的経緯を明らかにすることをめざした。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究は、江戸時代における地方諸藩の御用絵師によって描かれた寺社縁起絵巻を考察の対象とし、美術史学における作品制作史や受容史の観点から、地方寺社と諸国大名の宗教的、政治的な連帯性を捉え、寺社の信仰や伝承が諸藩の意図によって絵画化されることにより民衆への統治を確実なものにしていった「寺社縁起の政治性」という文化位相を明らかにすることを目的とした。

また、これまでの寺社縁起絵巻の研究は、「中世」という枠組みで取り組まれることが多く、「近世」という枠組みから寺社縁起絵巻を捉える視座に乏しい傾向にあった。そこで本研究は、各地方に遺る江戸時代の近世寺社縁起絵巻の所蔵調査を実施し、近世における寺社と御用絵師の関連性を解明すると共に、絵巻に描かれた絵図の意味や物語性を図像学の手法を用いて分析することをめざした。

(2) また本研究は、地方における寺社縁起絵巻の調査・報告を通じて、各地において活躍した諸藩の御用絵師の存在を掘り起こす契機となることをめざす。現在、各地方では、地元地域の人びとがみずからの暮らす場所の歴史や文化を探り出し、足もとから学ぶ活動が全国でおこなわれている。本研究もそうした諸地域の学術的な活動に積極的に参加することで、同地域における寺社縁起絵巻を紹介すると共に、同所で活躍した御用絵師の存在を身近に感じてもらうことを目指す。またこの目的によって、地域コミュニティの活性化を促し、地元の文化資源を再認識する機会を設けるものとして大きな意義をもつものである。

### 3. 研究の方法

(1) 本研究の方法は、九州、関東、関西、東北の寺社に遺る「近世寺社縁起絵巻」を実見調査し、その図像内容や資料形態を撮影記録、詞書・絵師落款・署名を翻刻することにより、地方絵師や諸藩の御用絵師が寺社とどのような関係の上で縁起絵巻を描くにいったのか、その実態を浮き上がらせる。とくに、寺社縁起絵巻の詞書・絵師の署名や落款を精査し、絵巻の序文や跋文の内容を詳細に検討することによって、諸藩の大名の菩提寺として寺社が寺社縁起絵巻の制作を大名の御用絵師に依頼した経緯を明らかにし、地方寺社と諸藩大名との絵巻を介した歴史的な繋がりを自明化する。

(2) また本研究は、地方の寺社縁起絵巻を現地調査するにあたって、絵巻のみならず、同寺社に遺される「縁起文献」、「布教活動を許可する諸藩朱印状」、「大名家との手紙」等の歴史資料を翻刻することにより、寺院と諸藩大名との歴史的経緯を明らかにし、大名の御用絵師が寺社縁起絵巻の制作にどのように関わってきたのか、その背景となる政治的な史的状況を把握する。地方の近世寺社縁起絵巻を考究するにあたって、その寺社が所属する諸藩の政治体制は看過することはできず、地方寺社と大名の関係性が近世の寺社縁起絵巻の制作に与えた影響は甚大である。その点に着目し、寺社側の史料だけでなく、諸藩大名に関する歴史資料にも分析を加え、諸藩大名が領内の寺社仏閣とどのような関係性によって結ばれていたのか歴史資料から明らかにする。

(3) 諸藩の大名が、御用絵師を介して、領内寺院の寺社縁起絵巻を制作する実態を把握し、絵巻の絵図や詞書に大名の人物や家紋などが描かれているか、そうした描出に関する図像分析をおこなう。そのことで、近世期における寺社縁起絵巻の伝承性に諸藩の大名のイメージ(図像・名称)を加える理由を、諸藩の大名が、寺社および寺社縁起が有する信仰性や宗教性における民衆への影響力を利用した政治的観点から捉えなおした。言い換えるなら、寺社縁起における信仰性や宗教性を利用することで民衆をコントロールする「寺社縁起絵巻の政治性」の文化位相の把握を目指した。

### 4. 研究成果

(1) 本研究において、以下、～ の3編の論文・論考を作成し、学術誌・書籍に掲載した。  
「尾張藩御用絵師・喜田華堂による「妙應寺縁起」とその後の展開 絵伝・宿場・稲荷講」  
(『佛教学』[第43号] 佛教学会、2018年、43-66頁)

本論では、岐阜県関ヶ原町妙應寺(曹洞宗)が所蔵する「妙應大姉縁起図絵」を取り上げた。同寺には、同題の縁起絵が二種類遺されており、そのうちの一つは、明治画家・喜田華堂(1802-1879)によって描かれたものである。華堂は、「尾張藩御用絵師」を勤め、尾張岸派の祖として、明治期初頭に活躍した日本画家である。同画家は、妙應寺の門前宿である今須宿の出身であり、幕末期(文久年間)に自らが施主として『青坂山妙應寺縁起誌』(旧略縁起の板本化)を作成し、自身の手で旧来の縁起画をそのまま模倣した絵伝を新たに制作した。本論では、明治画家が作成した「寺院縁起書」を紹介すると共に、華堂が新時代にむけて旧来の寺社縁起絵を模倣した意図を探り、自らの生誕地(今須宿)である寺院伝承に何を求めようとしたのかを論点とした。

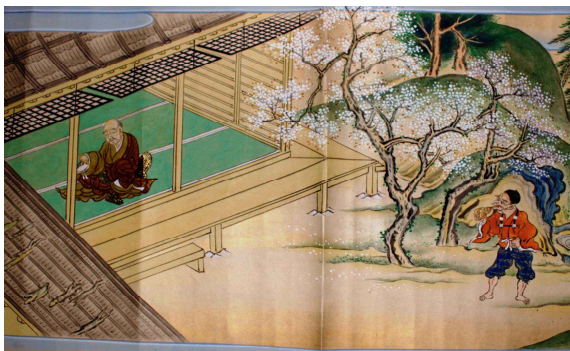
また妙應寺は、江戸期には今須宿場(中山道)の賑わいと共に栄えたが、明治期に入り、東海道線の鉄道敷設によって宿場が衰退すると、しだいに寺勢を衰えさせていった。そこで同寺は、旧来の寺院縁起に、今須稲荷なる「いなり伝承」を新たに加味することで、稲荷講の拠点とし、新しい信仰形態を生み出していく。本考では、寺院縁起が近代化のなかで衰退的に扱われていく通常の事例ではなく、むしろ逆に、その伝承性・信仰性を積極的に拡張させていった事象を取り上げた。

そして本論を通して、尾張藩御用絵師を勤め、尾張岸派の祖であった日本画家(幕末・明治画家)の喜田華堂が妙應寺の寺院縁起『青坂山妙應寺縁起誌』を製作し、それに伴い、同寺院に伝わる旧絵伝を模写していたことが明らかとなった。『青坂山妙應寺縁起誌』は、絵師が製作した(配布した)寺社縁起本として珍しい事例であり、かつ、幕末から明治の時代にかけて、絵伝が模倣されるという事実は、いかなる機能や歴史的意義を有するものであろうか、という課題も浮かびあがった。また、中山道の今須宿場と深い関係にあった妙應寺(宿場寺院)が、明治以降の「鉄道の敷設」や「宿場の衰退」などにより、稲荷講など、あらたな信仰性・伝承性を自らの寺院縁起に加えていった事実が本研究にて明らかとなった。言い換えるならば、神仏分離の流れではなく、むしろ神仏習合的な要素をより高めていく事例であり、その背後には明治期の神道政策等の影響があるという結論にいった。そして本論を通じて、明治以降の妙應寺では、『妙應寺由緒記及今須稲荷縁起 附今須名勝誌』等の資料からもわかるように、稲荷信仰の縁起、旧来の寺院縁起、同地の名所旧跡記、地図が寺院縁起のなかに並立的に記され、同寺院所縁の縁起譚・伝承譚が拡張していった状況を捉えることができた。

「《元三大師縁起絵巻》からみるポリティクスと両大師信仰 - 近世天台高僧絵伝の成立と天海の意向」 (『京都精華大学研究紀要』[第52号] 京都精華大学、2019年、2-30頁)  
 本論文では、江戸期において「両大師信仰」として「慈恵大師」(以下：元三大師)と「慈眼大師」(以下：天海僧正)が重ねられて信仰された理由を、近世の縁起絵巻(高僧伝)や天台宗の寺院資料をもとに解き明かすことを目的とする。その際に、以下、二点の視座を中心とした。  
 まず一点目は、江戸期において元三大師に関する 絵巻・絵図 や お札 などが数多く制作されたことにふれて、天海僧正の意向、すなわち「中世天台宗の講式の継承」や「山王一実神道の思想観」が天海の弟子に胤海たちによって、そうした絵画・図像制作の背景に込められていった点に着目する。

二点目は、こうした元三大師信仰が関東天台の談義所において盛んに行われた点に着目し、近世前期(元禄頃まで)に東叡山(寛永寺)を中心に、天海僧正の意向をくんだ関東天台の教義・学問が諸処の談義所で門下に伝達される体制の確立と共鳴しながら、まず、それら宗教的な学問所において元三大師が天海僧正と重ねられ、双方が天台復興の象徴として尊崇の対象となった実相にせまる。

なお、江戸の両大師信仰は、これまでの研究においてほとんど取り上げられることはなかった。そこで本論では、江戸庶民に流行したこうした高僧(天台僧)信仰が、中世期の高僧絵図が有した儀礼性や、近世の縁起絵巻が有する中世期の高僧伝の継承性を基盤として成り立つものであったことを明らかにするものである。



《両大師縁起絵巻》  
 (青森県弘前市報恩寺蔵)

「江戸の地獄絵と閻魔信仰：および地獄絵の図版解説」

(『幽霊画と冥界』別冊太陽 246、平凡社、84-105頁)

本文は論文ではないが、本研究課題の調査を通じて得られた資料データや見識を記事(論考文)にまとめたものである。中世期における日本人の地獄観と異なり、江戸人の地獄観は貨幣経済や大衆メディア化の傾向にて、日常のごく身近な場所に地獄を見出し、しかも、祭礼などの都市空間にみずから地獄を作り出してきた点を記している。また本記事では、そうした地獄の空間が江戸人の閻魔信仰を基盤として成り立っていたことを指摘し、彼らは未知なる冥界を恐れるのではなく、巨大な閻魔王のモニュメントを築くような遊樂にみちていた点を読者にわかりやすく伝えている。

また同記事の図版にて紹介した《妙應大師縁起図絵》と《往生曼荼羅図》は、本研究課題によるフィールド調査にて撮影、図像分析したものであり、同絵伝や絵図の地獄観が絵解きされる背景に、諸藩の御用絵師が関係していたことを図版解説にてふれている。とくに秋田市の天徳寺に遺る《往生曼荼羅図》は、同寺が秋田藩名家の菩提寺であった経緯から秋田藩の御用絵師が関わっていた可能性も指摘でき、その内容は『観薬王薬上二菩薩経』を絵画化したものである。下部には、「地獄の洞門」が描かれ、地下には三層の地獄を描き、江戸後期(十九世紀)に、中世的な階層地獄を描いた絵図はめずらしく、地方では古き地獄観が語られていたことを本文にて指摘している。

(2) 本研究において、以下、 ~ の3編の論文を作成中であり、下記の学術誌・書籍に投稿予定である。

「摂津国久安寺《久安寺真名縁起絵巻》と法橋泰晋 近世の行基信仰の視点から」

(『佛教芸術』あるいは『京都精華大学研究紀要』に本年度中に投稿予定)



「久安寺真名縁起絵巻」は、仮名縁起絵巻と共に、行基伝承をもとに池田藩・久安寺の寺院創建譚を描いたものであり、同寺院には、文章のみの古縁起も遺されている。絵師の法橋泰晋に関しては不明瞭な点が多く、本研究にて同絵師に関する歴史資料の発見し、同絵師を介して「久安寺」と「京の朝廷」が結ばれる場を論じる論文を作成している。その際にポイントとなるのが、同寺院に伝わる行基信仰であり、法橋泰晋と行基信仰の関わりも論じるつもりである。

「福岡藩御用絵師・衣笠守弘《氏八幡宮縁起絵巻》からみる黒田家と宗像大社の史的連関」  
(『説話・伝承学』あるいは『仏教芸術』に本年度中に投稿予定)

福岡藩の御用絵師である衣笠守弘が描いた《氏八幡宮縁起絵巻》が宗像大社に遺されており、本研究を通じて、絵巻の撮影・実測等の調査や図像内容の分析をおこなった。同絵巻は、前半は宗像大社および織幡神社の縁起が描かれており、後半は《増福院縁起絵巻》と同様に菊姫怨霊譚が描かれる。本論で着目すべきは、前半の宗像大社および織幡神社の縁起であり、同絵巻には和歌を記した短冊も添えられており、絵師の衣笠守弘を抱える福岡藩黒田家と宗像大社の関係性について、その絵図・詞書からの分析を試みた内容である。



衣笠守弘  
《氏八幡宮縁起絵巻》  
(福岡県宗像市宗像大社蔵)

「《鍛冶神掛図》のイコノグラフィーと修験信仰 盛岡藩御用絵師に関する視座から」  
(『美術史』あるいは『仏教芸術』に本年度中に投稿予定)

岩手県立博物館に所蔵されている《鍛冶神掛図》(3幅)の図像調査をおこない、本論にて、それらの図像が何を意味しているか、その内容を読み取ったものである。また同絵を描いた絵師については不明な点も多く、江戸時代における盛岡藩の御用絵師と推測されるが、本研究において、その詳細を明らかにすることはできなかった。

さらに本考においては、こうした絵図が描かれた文化的背景に着目し、東北地方における「刀鍛冶の伝承」と「修験道」が重ねられた信仰形態をもとにしている点を考察する。

(3) 本研究では、佛教文學會にて、公開シンポジウムを企画・立案・実施した。同シンポジウムは、自身が研究代表者をつとめる2013年度 2016年度「明治期の高僧絵伝」における地方寺社伝承の近代化に関する研究(独立行政法人日本学術振興会[若手研究B])の成果をふまえて、本研究課題にて、以下のシンポジウムを実施した。

佛教文學會6月例会シンポジウム「寺社縁起に近代はあったのか?」2018年6月17日

本シンポジウムでは、諸地域の宗教空間に着目することで、「コト」と「モノ」の関係が揺らぎつつある時代に、その「縁起性」を失わず、さらにそこに、いかなる本質を有してきたのかをテーマとした。また、明治以降の寺社縁起なるものが「近代」のコンテクストを有するの否かを問うのではなく、旧来の宗教空間が、近代の場においてどのように受け継がれてきたのかを、議論する内容であった。とくに、近代文学と寺社縁起の関係、歌謡や学校文化と高僧伝のつながり、縁起研究を現代の教育への活かし方など、発表は多岐にわたった。

(4) また本研究課題にて、上記の「論文発表」および「公開シンポジウム」以外に、諸地域の寺社へ縁起絵巻・絵伝・地獄絵のフィールド調査を実施したので、下記の～に記す。

- 「絵師不明《増福院縁起絵巻》」(福岡県宗像市増福院・再調査)
- 「狩野宗信《唐津市浄泰寺の地獄絵図》」(佐賀県唐津市浄泰寺・調査)
- 「宮川良香《唐津市西福寺の地獄絵図》」(佐賀県唐津市西福寺・調査)
- 「絵師不明《播州清水寺の地獄絵図》」(兵庫県加東市播州清水寺・調査)
- 「絵師不明《岐阜県岐阜市正法寺の地獄絵図》」(岐阜県岐阜市正法寺・調査)
- 「絵師不明《釜石市個人宅の鍛冶神掛図》」(岩手県釜石市個人宅・調査)
- 「絵師不明《釘抜念仏縁起絵巻》の複製本・略縁起書」(栃木県日光市興雲律院・調査)

なお、《僧婦夢物語絵巻》と《池辺寺縁起絵巻》の二点に関しては、当初の計画にて現地調査を実施する予定であったが、「2018年の九州豪雨」などの影響により原本を閲覧できず、研究調査がうまく行えなかった。そのため、急遽、「《元三大師縁起絵巻》からみるポリティクスと両大師信仰」( - (2)) および「《鍛冶神掛図》と盛岡藩御用絵師に関する調査研究」( - (3)) の2点の課題に変更して、フィールド調査を実施した。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

鈴木堅弘「尾張藩御用絵師・喜田華堂による「妙應寺縁起」とその後の展開- 絵伝・宿場・稲荷講」、『佛教文學』第43号、佛教文學會、2018年、査読無、PP.43 - 66

鈴木堅弘 「《元三大師縁起絵巻》からみるポリティクスと両大師信仰 - 近世天台高僧絵伝の成立と天海の意向」、『京都精華大学研究紀要』、第52号、京都精華大学、2019年、査読有、PP.2 - 30  
www.kyoto-seika.ac.jp/researchlab/wp/wp-content/uploads/suzuki5.pdf

〔学会発表〕(計 3件)

鈴木堅弘 「明治画家・喜田華堂による「妙應寺縁起」とその後の展開 宿場・絵伝・稲荷講」、『佛教文學會、2017年6月17日、於慶應大学三田キャンパス

鈴木堅弘 「《元三大師縁起絵巻》と天海の意向 高僧縁起絵巻のポリティクスと両大師信仰」、『寺社縁起研究会(関西支部)2018年度定例会、2018年7月18日、於京都精華大学

鈴木堅弘 「日本文化における 地獄絵 の機能と空間 唱導・後戸を中心に」、『北白川 EFEO-salon 2018-2019「日本における宗教と民衆への教え」2018年11月30日、於 EFEO-Kyoto

〔図書〕(計 1件)

鈴木堅弘 「江戸の地獄絵と閻魔信仰：および地獄絵の図版解説」(論考記事の掲載)、『幽霊画と冥界』別冊太陽246、平凡社、査読無、PP.84 - 105

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：京都精華大学

部局名：人文学部

職名：特別研究員

研究者番号(8桁)：80567800

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。